ときの話題

ホクレン夢大賞の人々

北海道大学農学部教授　太田原　高昭

二年目を迎えた「ホクレン夢大賞」

北海道の農業・農村の担い手に夢と希望を与えようという目的で平成六年度に発足した「ホクレン夢大賞」の第二回目の表彰式が、今年の三月四日に行われた。日本農業賞をはじめ全国的、全道的に多くの農業賞があるが、「ホクレン夢大賞」は従来のものにくらべてかなりユニークな存在である。

最大の特徴は、この賞が①農業者部門、②研究普及部門、③農業応援部門の三部門からなり、農業者だけでなく試験研究や普及活動にたずさわる人々、また消費者やジャーナリスト、村おこしグループなど農業の応援団をも対象にしていることである。これは農業の夢はみんなでつくるものという考え方に基づいており、これまでの表彰制度にはなかった発想である。

この種の賞につきまとう権威主義から免れるためにさまざまな工夫がなされているのも大切な点であろう。応募書類も簡潔であり、農業者部門ではあまり細かい経営内容は問わないようになっている。

出来るだけ応募しやすいように配慮されており、自薦でもよい。固定した価値観の下で実績を競うのではなく、多様な価値観をふくむ「夢」の部分を大切にしようとしている。

この賞はもともと北海道地域農業研究所が提案、企画したものであり、私はその趣旨におおいに賛同して企画段階から参加し、審査員の一人にもなっているので自分の思い入れを含めた紹介になってしまったが、これまでのところこうしたねらいはかなり達成されていると言ってよいと思う。実際に毎年のこの賞の審査は、私にとってたいへん楽しみな作業となっている。

そこで第二回の受賞者を紹介しておこう。

◎農業者部門

大賞　平取町野菜生産振興会
　　トマト・キュウリ部会
　　（平取町）

同　農事組合法人

優秀賞　柏台生産組合（美瑛町）
　　空知農業協同組合青年部連合会（岩見沢市）
同　　和寒町葉菜部会（和寒町）

◎研究普及部門
優秀賞　田中　守（深川市）

◎農業応援部門
大賞　有限会社ファム・エイ（中標津町）
優秀賞　北海道そば研究会（奈井江町）
同　　新得農村ホリデー研究会（新得町）

大接戦だった農業者部門

ひとつひとつ詳しく触れたいものばかりだが、とてもそれだけのスペースはないので、私にとって印象的だった点を中心に簡単に紹介しよう。

農業者部門では平取町野菜生産振興会と柏台生産組合が大接戦となり、とても優劣はつけられないということで二つの大賞が生まれた。

平取町野菜生産振興会は道内のトマト市場を席巻した「桃太郎」、トマトジュース「二シパの恋人」で知名度は抜群である。沙流川流域の小規模水田地帯が日照時間が長い有利性を生かして水稲と施設園芸の複合経営に活路を見いだし、「農業は面積じゃない」を実証した。Uターンがあいつぎ専業農家率が高まるというまさに夢たっぷりの実践である。

柏台生産組合は、農事組合法人としてすでに四半世紀の歴史をもつ四戸一一名の共同経営である。北海道では法人や共同経営はそう珍しいものではないが、この組合が高く評価されたのは何といっても一人ひとりの構成員を大切にする福利厚生、災害補償、老後保障、健康管理の充実である。女性や後継者を含む一一名の組合員はすべて給料制。社会保険や農業者年金への加盟はもちろん、農協共済の掛け金も組合が全額負担する。定年制（男六五歳、女六〇歳）と退職金制度も大きな特徴で、徹頭徹尾「人」に焦点をおいて「安心して働ける農業」を実現したところが素晴らしい。

優秀賞の空知農協青年部連合会は、米市場開放阻止運動で積極的な活動を展開したが、その中で消費者と連帯した世論形成の重要性を感じ、さまざまなユニークな運動を粘り強く続けている。札幌での風船アドバルーンや雪原に融雪剤で大きく「スノーメッセージ」を描く活動などマスコミの注目を引く派手なこともするが、農業現場を紹介するビデオを作成して小学校に寄贈したり、産直先の生協組合員の子供を体験学習に招待するなどの地道な活動にも手ごたえを感じている。こうした取り組みは確実に組織の活性化をもたらしているようで、全国的な課題となっている農政活動の革新に展望を開きつつあることが高く評価された。

「越冬キャベツ」で有名な和寒町葉菜部会は、北限の米づくりが減反政策の壁に突き当たった時期にキャベツやカリフラワーを導入し、北海道における転作野菜の先鞭をつけた実績をもっている。とくに「越冬キャベツ」の開発は冬場の仕事をつくりだし、出稼ぎ解消の大きな力となった。北海道のハンディとみなされていた雪や寒さを逆に資源として活用する「夢」を早い時期に実現した意義も大きい。

研究普及部門優秀賞に選ばれた田中守氏は、空知北部地区農業改良普及所長など永く北空知の農業指導に励まれた優れた指導者である。北海道米の今日を築く上で「ユーカラ」に始まる優良米生産の路線を敷いた北空知の先進性は重要である。それはもちろん多くの人々の協同の力によるものであるが、その代表者として田中氏を挙げることに異議のある人はいないだろう。地道な普及活動の分野から選ばれたこともうれしかった。

力強い農業の応援団

農業応援部門は、この賞の最もユニークな部門である。第一回目も東藻琴高校、名寄市学校給食センター、鹿追町ファームイン研究会、北海道消費者協会という異色の顔触れが受賞して注目されたが、第二回目も劣らぬ多士済々ぶりであった。

大賞の有限会社ファム・エイは、平成元年に初めての民間会社による酪農ヘルパー組織として設立され一三名のヘルパーを擁している。当初は酪農家の理解も浅くキャンセルに泣かされる状態であったが、やがて信頼を得て利用率が高まり地域に不可欠な存在となっている。単に経営が成り立っている民間ヘルパー組織というだけでなく、農業を目指す若者に仕事の場を提供している意義が大きい。しかもそうした若者の新規就農や後継者との結婚などを積極的にバックアップしており、すでにそうしたケースも現れている。このような地域農業のための人材発掘と担い手育成を意識的に進めている点がまことに力強い応援団なのである。

優秀賞の北海道そば研究会は、奈井江町の「そば処からまつ園」を中心とするそば好きの集まりだが、単なる趣味集団ではなく道産そばの良さをひろめることを目的としており、そば打ちやそば料理の研究普及と共に、生産者との交流を深める中で栽培や製粉の改善に大きな役割を果たして産地から感謝されている。各地で様々なイベントに参加しているほか全道規模の「そばシンポジウム」を主催して道産そばへの関心を高めるなど活発な活動を行っている。粗放作物として取り扱われがちなそばを、北海道が誇る特産物へと育てていく上でまことにこころ強い応援団であるといえよう。

十勝の新得町には観光農業を目指す地元の農業者や、レストラン、ペンションを営む都会からの移住者など「グリーン・ツーリズム」につながる試みがあちこちで見られるようになったが、これらの人人がネットワークを形成して農村の魅力を総合的に提供しようと結成したのが新得町農村ホリデー研究会である。同研究会が発行する「新得農村ホリデーガイド」には町内の様々なスポットが一目で分かるようになっている。平成五年に二〇〇〇部発行したのが大好評で、七年には七〇〇〇部発行したというから、それだけ新得を歩く人が増えたことになる。新しい発想で農村の「魅力」「楽しさ」を全面に出した活動が評価され、期待されている。

このようにみてくると、口を開けば厳しいといわれる北海道の農業・農村にもさまざまなかたちで明るい夢が育っていることがわかる。なにげない日常の営みの中にも未来につながる夢を「一隅照らす」眼力で発見し、それをひろく紹介してみんなを励ましていくことが「ホクレン夢大賞」の役割であろう。今年もまた自薦、他薦でたくさんの夢が寄せられることを楽しみにしている。

太田原　高昭（おおたはら　たかあき）さん

昭和14年　福島県会津若松市生まれ。
昭和38年　北海道大学農学部（農業経済学科）卒業。
昭和43年　同大学院博士課程単位取得。
　　北星学園大学経済学部勤務。
昭和46年　北海道大学農学部勤務。
昭和52年　農学博士。
平成２年　北海道大学農学部教授（協同組合学講座担当）。
〔主要著書〕
『地域農業と農協』（昭和54年　日本経済評論社）。
『明日の農協』（竹内哲夫教授と共著　昭和61年　農文協）。
『国際農業調整と農業保護』（共編著　平成２年　農文協）。
『系統再編と農協改革』（平成４年　農文協）。
『北海道農業の思想像』（平成４年　北海道大学図書刊行会）。